

「我は彼の父となり、彼は我が子となるべし」と記され「我」は神、「彼」はダビデ王の種子を指し、そうして此の場合に於ては單にダビデの子といふのでは無くして、民の首長、代表者としての「彼」を指したのであるといふのが、神學者間に於ける解釋のやうであるが、併しクリストの教は此の點に於て全く舊約書のそれとは異つて居るといはれてゐる<sup>12</sup>。若し此の經に説く所の論據を聖書中に置かうとするならば、或は舊約書中の此の一節などがそれに擬せらるべきでは無からうか。そうして之を支那に於る天子即ち天帝の子、天命を受けて國君たる人に事ふる支那の國民道德に順應せしめ、その教を布く便宜に供せんが爲に、敢てかゝる解釋を施したものと考へれば、極めて容易に其の由來を説明し得られると考へる。次の父母に事ふることについても同様であつて、舊約書の出埃及記二〇ノ申命記<sup>五ノ一六</sup>などに「汝の父母を敬へ」といへるを始め、新約書にも以弗所書<sup>六ノ二</sup>に兩親に従ふべきこと、父母を敬ふべきことを説いてあるが、然も之に事ふることを以て、神に事へ帝王に事ふると並べて、三事同一種のことゝまで説くが如きは、勿論また此の教義本來の考とは思はれない。これも支那に於て子が親に事ふる道、即ち孝道に順應せしめた考であつて、その教義の宣傳を助くる方針の下に説かれたものに外ならぬと思はれる。

此の如く忠孝二道に即して、之と神に信事することゝを同一事とするといふ考が此の經典に記されてゐるのは、之を景教が支那に來るまでの沿道の或る地方に於て發達したものと見るよりも、其の宣教師が、支那に來て、支那の社會状態を見聞してから起つたことゝ見るのが適當であらうと思ふ。尤もネストル教が東して支那に傳はるまでの間に於て、其の教義が如何に説かれて居つたものであるかは今日尙充分明らかではないやうであるが、それにしても三位一體の考について、他の宗派からあれまでの非難をうけ、遂に異端を宣せられて東方に逃げねばならな